印度更紗

眞珠抄

印度更紗 第一輯

EX-LIBRIS
No 歌 59

印度更紗第壹輯

LIBRIS
59

印度更紗第壹輯

眞珠抄

及び短歌

北原白秋著

東京金尾文淵堂版

LIBRIS
59

印度更紗の言葉

心ゆくまでわれはわが思ふほどのことをしつくさむ。ありのまま、生きのまま、光り耀く命のながれに身を委ねむ。れうらんたれ、さんらんたれ。わがうたはまた、印度更紗の類ひならねど、滋くつや出せ、かつ煌れ。

千九百十四年九月　　白秋

LIBRIS 59

眞珠抄　短唱

わが心は玉の如し、時に曇り、折にふれて虔ましき悲韻を成す。哀歡こごめがたし、ただ常住のいのちに縋る。眞實はわが所念、眞珠は海の秘寶、音に秘めて涙ながせよ。

潤ほひあれよ眞珠玉幽かに煙れわがいのち

LIBRIS
59

LIBRIS 59

永日禮讃

ひとり海のほとり斜なる草原の中に寝ころびぬ。日の光十方にあまねく、身をかくすよすがもなし。眞實にただひとり、人間ものものあらざれば感極まりて乃ち涙をぞ流しける。

滴るものは日のしづく靜かにたまる眼の涙

人間なれば堪へがたし眞實一人は堪へがたし

珍らしや寂しや寂しや人間のつく息

眞實寂しき花ゆゑに一輪草とは申すなり

哀れなる龍膽の春の深さよ、あな春の深さよな

LIBRIS
59

磯草むらの螽斯(きりぎりす)鳴かずにゐられで鳴きしきる
宙を飛ぶ燕(つばめ)ひもじかろ燕(つばめ)

鳥のまねして飛ばばやな光の雨にぬればやな
木が光りゆらめくぞよとめごなき鳥春の鳥

あまり冷(つめ)たし蟲の穴さのみ金銀珠玉な鏤(ちりば)めそ
光りて企(たくら)む蟲の角(つの)メフイストフエレスが身のこなし

とめごなや凬がれうらんとながるる
なびけば光る柳の葉光らぬ時が怖(こは)やの

山が光る木が光る草が光る地が光る
片面光る槐(えんじゆ)の葉両面光る柳の葉
勿體なや何を見てもよ日のしづく日の光日の
しづく日の涙

源吾兵衛

玉ならば眞珠一途(いちづ)なるこそ男なれ
心から血の出るやうな戀をせよとは教へまさ
ねどわが母よ
蜥蜴(とかげ)が尾をふる血のしみるほどふる

EX LIBRIS 59

悲しや玉蟲が頭(あたま)の中に喰ひ入つたわ
病氣になつた氣が狂(ふ)れた一途(いちづ)な雛罌粟(ココリコ)が火に
なつた
百舌のあたまが火になつた思ひきられぬきり
やきりきり

散ろか散るまいかままよ眞紅(まつか)に咲いてのきよ
人目忍ぶはいと易しむしろわが身を血みどろ
に突かしてぢつと物思ひたや
日はかんかんと照りつくる血槍かついでひと
をどり耶蘇を殺してユダヤの踊をひとをどり

ふくら雀は風にもまるる笑止(せうし)や正直一途(いちづ)の源吾兵衞はひよいと世に出て人にもまるるもまるる

冥罰(みやうばつ)を思ひ知らぬか赤鼻の源左めなまじ生木を腕で折る

息もかるるし氣もかるるしいつそ裸で笛吹かう

月光禮讃

猫のあたまにあつまれば光は銀のごとくなり
われらが心に沁み入れば月かげ懺悔(ざんげ)のたねとなる

巡禮

ひとり旅こそ仄かなれ空ははるばる身はうつつ
巡禮のふる鈴はちんからころりと鳴りわたる
一心に縋りまつればの

雪の山路

親鸞上人ならねども雪のふる山みちをしみじみと越ゐ申す雪はこんこん山みちを

LIBRIS
59

幼帝

王冠燦爛日燦爛涙こぼせばなほ燦爛

王冠にひよいと來てとまる蜻蛉とんぼ重いか
眩しいか

蜻蛉重きにあらねども王冠燦爛ただ涙

いとしや晝の日なかを小さな銀の王樣が泣か
しやる

王樣の冠がゆらいだ、と思つたら死なしやつた

59

金

物言はぬ金無垢の彌陀（みだ）の重さよ

煙

煙は寥（さみ）しやむごともなし立つな煙よ
幽かに煙のもつるるはわが常住（じやうぢやう）の姿なり幽か
なれ煙

BRIS
59

澪

しみじみと澪がわかるる、これがわかれか
光りてながるるみをのすぢ光りてゆらめくみ
をつくし

泳ぎ

寂しければ海中にさんらんと入らうよ
燦爛と飛び込めば海が胸につかはる泳げば流
るる力いつぱい踏んばれ巖の上の男

BRIS
59

つまづき

燦爛と蹴つまづいたが痛かつたか木の根

路のべの柳ただ見て過ぎなば過ぎぬべし
われはただ禮拜かしこまる

有難や柳がさんらんと光るわ、そつと根に腰下
ろいてさてそつと行こかの

乾草

秋の野にいづあまりに明るかりければ

乾草に火を點けむぞ
きりぎりすきりぎりす

BRIS
59

秋日小韻

妹よそなたにはきこゐぬか秋のといきが
ふけゆくものは茶の利休ほのかに座るわがこ
ころ

光る木によぢよ寂しくば子ども光る木によぢ
よかし
日もうらら風もうらら落つる木の葉やれの落
つる葉
眼(め)をあげ百姓枯木に雀がこぼるるぞ

卓上

深(ふか)い溜息(ためいき)がきこゑた、はあていまのは誰のとい
きぞわが前の眞赤な酒のさかづき

けふも暮るるかあかあかと暮るるか何もせな
んだでなう

われもする人もする長ためいきのヴァイオリン
ほのかならずば何かせむ惜め涙よ
純眞無垢(じゆんしんむく)の涙こそわれと汝(な)がものヴエルレン

蛇の舌

冷たきものは蛇の舌娼妓末社が眼の光
執念の白蛇死んだ女王の陰に入る、といの
女王はクレオパトラ

悲しや鐘の中、中の安珍金の中の眸
蛇も交むか眞實にそのほかはみな嘘ぞかし
ほれぼれと女からだまされて見たやの

子ごも、

天眞流露子ごもがはねるぞはねるぞ

飛び越せ飛び越せ薔薇の花子ごもよ子ごもよ
薔薇の花

深夜

月ほそく光りたり眞の夜中に懺悔せよとか
寸金本土の阿彌陀佛光るは海の眞夜中

海底

死んで光るものは珊瑚の巣弟アベルが眼の光

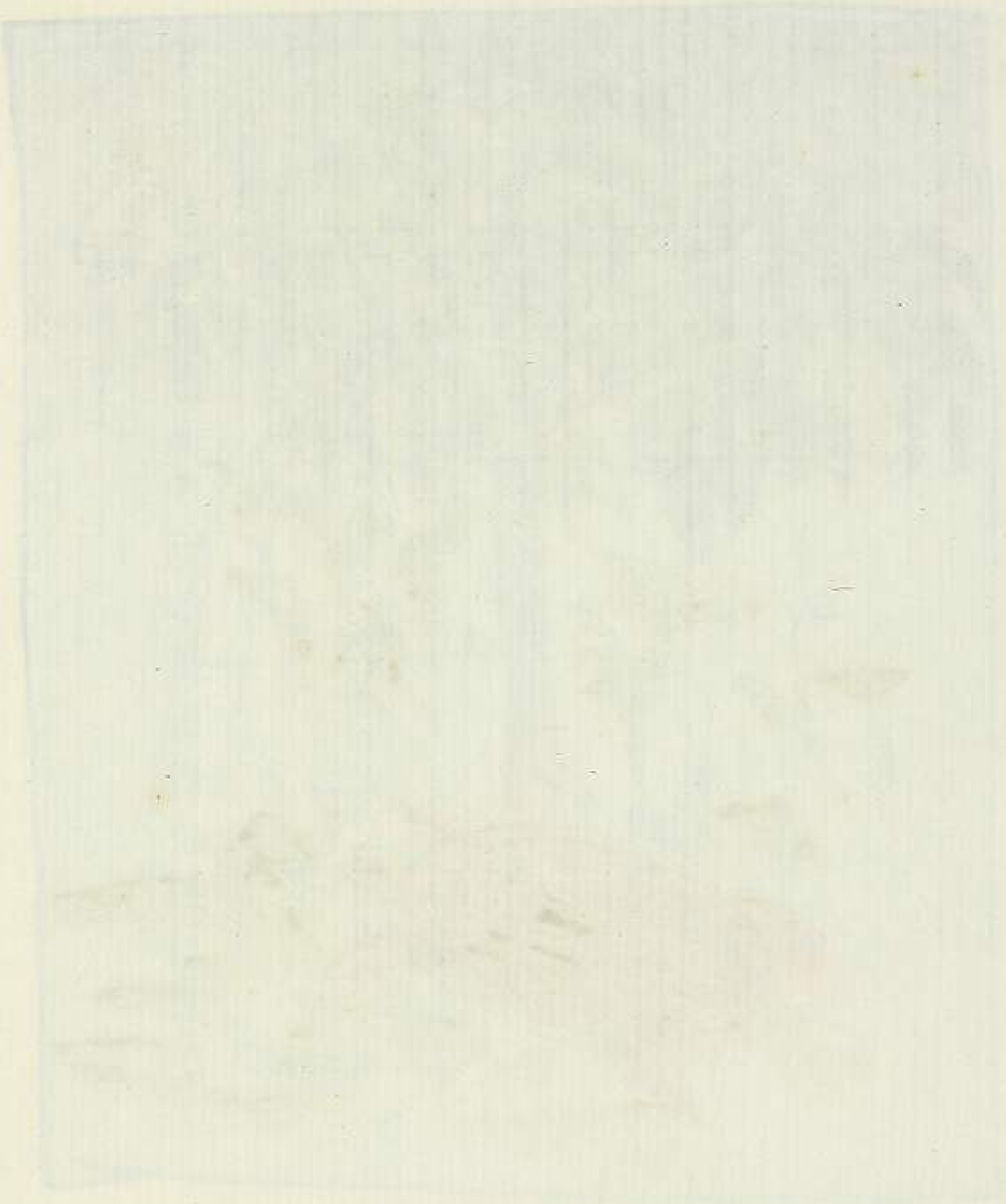
カイン怒つて弟アベルを殺すこれ悪のはじめなり

恐らくは花ならむ海の底の海松の小枝に輝く
玉あり輝く玉あり

正覺坊

正覺坊

燦らかにごむの大樹に射す光燦らかに圓く眠
る正覺坊
まんまろき正覺坊に日の光ひかりこぼるる麗
らかなれば



ゆつたりと正覺坊ぞねぶりたる安心をしてね
ぶれるものか

大きなる正覺坊が虔ましくねぶり目ざめて眼
ひらくあはれ

こはをかし柔かなこの腋の下櫟ぐればふふと
笑ふ正覺坊

正覺坊ふふと笑へり麗らかに櫟ぐらるればう
れしきものか

正覺坊寂しくぞあらむ裸にてわれもころがる
麗らかなれば

仰向けど寂しくぞあらむ正覺坊かくしどころ
も燦らかなれば

摩訶不思議正覺坊の燦らなるかくしごころの
ここのかなしさ

汝はあまりに深くあがりつ正覺坊ここは正午
のバナナの林

正覺坊ころがされてははたはたと手足もがけ
ど歩まれぬかな

輝る日麗ら萬劫經たる海龜のこの諦めの大き
なるかも

けふも終に暮れたり赤くまんまろく大龜の腹
に日輪が載り

正覺坊いぢめつくして子どもらがかへる海邊
の劫初の耀き

玉蜀黍

玉蜀黍耀ふ中にうつら來てしばらく光り誰か
消ゆつも

見廻はせば十方光くまもなししばしばらく空も動
かであるも

寂しさや黍は黍としさらさらさらと葉ずれのひび
き立てにけり夏

玉蜀黍輝り極まれば言葉なくそがひに息する
人の戀しさ

ここ過ぎてかの高山の半腹まで玉蜀黍は輝り
きらめけり

ここよりも輝りきらめけるなりここよりも向
うの山の玉蜀黍は

彼よりも輝りきらめけるなり彼よりもかの上
の高き玉蜀黍は

寂しさやここのかしこの高山の玉蜀黍は輝り
きらめけり

途上所見

女人遠離

思ひ屈ししばし見恍れつひるさがり陶器師は
ろくろを廻はす

ほれぼれと萬里子忘れつおもしろく陶器師は
ろくろを廻はす

ちちのみのちちも忘れつおもしろく陶器師(すゑものつくり)は
ろくろを廻はす

はははそはのははも忘れつおもしろく陶器師(すゑものつくり)は
ろくろを廻はす

さびしけご女房おもはずおもしろく陶器師(すゑものつくり)は
ろくろを廻はす

もろもろのぼんなうりんねただ廻る陶器師(すゑものつくり)は
ろくろを廻はす

ろくろ見るろくろ廻るがただたのし陶器師(すゑものつくり)は
ろくろを廻はす

ろくろ見るろくろまたなし己(おの)れなし陶器師(すゑものつくり)は
ろくろを廻はす

眞珠抄

をはり

眞珠抄目次

眞珠抄六十八章……一
正覺坊十四首……三一
玉蜀黍八首……三六
途上所見八首……三九

眞珠抄餘言

一、眞珠抄の短唱六十八章は千九百十三年九月わが三崎滯留中初めて提唱し、そののちをりをりに書きあつめたるものなり。わが短唱はわが獨自の創見にして、歌俳句以外に一の新體を開くべきものなり。詩形極めて短小なれども、かの如く既成形式によらず、自由にリズムの瞬きを尊重し、眞實眞珠の如く、純中の

純なる單心の叫びを幽かに歌ひつめんとするなり。
わが短唱も愈日本在來の小唄のながれを超ゑて幽かに象徵の奥に沈まむとす。白金の靜寂わが上に來る、歡ばしきかな。

一、卷末に添へたる短歌のうち正覺坊玉蜀黍の二章二十二首は南海の遠島小笠原放浪中の記念にして、途上所見の八首は最近の新作なり。

一、この印度更紗は本輯以後各月一輯を上梓し、輯を變ふるが每にその名を改め、色々に印度更紗の模樣の如くわが愛慕する人々の書架にかなしく入り亂さしむべし。

一、第二輯は未だ定かならねど恐らく小笠原の歌を以て滿たさるべきか。　敬具再拜。

八月下浣　　著者

大正三年八月二十九日印刷
大正三年九月一日發行

著作權所有

金參拾五錢

著者　北原白秋
東京市麴町區平河町五丁目五番地
發行者　金尾種次郎
東京市京橋區銀座三丁目十七番地
印刷者　三間隆次
東京市京橋區銀座三丁目十七番地
印刷所　三間印刷所活版部

東京市麴町區平河町五丁目五番地
發行所　金尾文淵堂
特電話番町二〇九三番
電話番町四九二五番
振替東京三八一七番